



これくらい大丈夫…禁物

お酒

横浜市内の居酒屋が小学6年の女兒らにビールなどを提供したとして、風営法違反容疑で摘発された。宴席に付きもののお酒。日本は酒に甘い文化とされるが、さすがに未成年、それも小学生相手では許されない。ところで日本の「お酒は20歳から」。そもそも飲酒は未成年者にどんな悪影響があるのか、生活部取材班が調べた。

軽くすすめないで!

未成年者への害 深刻

「未成年者飲酒禁止法」の制定は一九二二（大正十一）年。国民の生活レベルが、今は大きく異なる九十年前から変わっていない。厚生労働省が対策・健康増進課は「飲酒年齢は国によって十九歳や二十一歳などばらつきがある。二十歳という年齢に科学的根拠があるわけではないが、心身への影響から区切りとなっている」と説明する。

心身への影響とは、具体的にどのようなものなのか。未成年者の飲酒問題に詳しい久里浜医療センター（神奈川県横浜賀西市）の樋口進院長（精神医学）は「人間の脳が成熟するのは二十歳ごろ。それまでは神経細胞が発展途上

で、せっかく育った神経細胞が飲酒で死んでしまふ」と話す。特に人間らしさをつかさどる脳の前頭葉に影響する。萎縮して、無気力や記憶力の低下につながるほか、他人への配慮ができなくなる可能性も。さらには、骨の成長や生殖機能の発達の遅れも指摘されている。

また、子どもはアルコールを分解する肝臓の酵素が十分でないため、急性アルコール中毒になりやすい。飲み始めてから依存症になるまでの期間も、大人より短いという。依存症の専門治療を行う井之頭病院（東京都三鷹市）の菊池健院長（精神科）は「患者は、十代から飲み始めたケースが多い。我慢

することの大切さを学ぶ子ども時代にお酒を飲むと、適量が分からず、飲む量を抑えられなくなる」と話す。ただ、子どもの飲酒はここ二十年余り、減少傾向。厚生省の調査によると、特に男子で顕著で、月一回以上、飲酒している割合は、中学一年で一九九六年に17%だったが二〇〇八年には4・8%に、高校三年では53・1%か

脳細胞破壊	記憶力低下	骨・生殖機能の発達遅れ	中毒や依存症 高リスク
-------	-------	-------------	-------------

ら27・1%にそれぞれ減った。

一方、飲酒経験を場面別でみると「冠婚葬祭」が29%、「家族と一緒に」が25%で、二つで半数を超える。親族などの集まりで「あなたも大きくなったから、一杯どつ」と未成年者に勧めて、それが飲酒習慣につながりがちな構図が浮かび上がる。

大人は子どもの飲酒に対して、どんな態度で臨めばいいのか。

教育評論家の尾木直樹さんは「自分の小さい頃や学生時代を判断材料にしてはダメ。『酒くらいいいじゃないか』という緩い意識は、今の時代には禁物」と指摘する。

「アルコールの特性や害について、小学生のうちに、家庭や学校で話す場がもっとあっていい。イッキ飲みが強要で犠牲になる大学生がいる社会を変えな」と強調する。

東京成徳大学の田村節子教授（学校心理学）は、多感な思春期の子どもたちが大人に反発しがちなことを懸念する。「頭」ではなく、アルコールの心身への影響を示すデータなどを準備して、毅然とした態度で「心配している」という思いを伝えて」と提案している。